

『源氏物語』の表現技法
—— 表現・語り・引用 ——
・目次

凡例	8
序章 『源氏物語』の表現・語り・引用——教材論への視座——	9
I 『源氏物語』の表現	11
II 『源氏物語』の語り	13
III 『源氏物語』の引用	15
IV 教材の表現に関する研究	17
I 『源氏物語』の表現	23
第一章 桐壺巻の表現構造——他者によって規定される光源氏——	25
一 はじめに	25
二 桐壺巻研究史	26
三 桐壺巻のもくろみ——政治的な立場をよむ——	27
四 桐壺帝と左大臣の密約の可能性	32
五 「いづれの御時にか」について	36
六 桐壺巻の語り手について	38
七 桐壺巻における他者の役割	41
八 桐壺巻の時間	44
九 結び	46
第二章 花宴巻の方法——桜花宴と藤花宴——	49
一 はじめに	49

二 「花の宴」ではなく「桜の宴」の意味	50
三 光源氏の春鶯囀と頭中将の柳花苑	58
四 藤の花の宴——桜二木と藤の花	65
五 結び	70
第三章 浮舟造型の方法——かきおこす女とゆだねる女	72
一 はじめに	72
二 「いとをかしげなる女」の正体をめぐって	75
三 「かきおこす」について——身と心の乖離、御息所の場合	77
四 浮舟の独詠歌における「身」について——出家以前と以後	81
五 六条御息所から浮舟へ——身にしたがふは心	86
第四章 手習巻におけるあま衣歌	89
——早蕨巻の宇治中君の詠歌をてがかりに	89
一 はじめに	89
二 「あまごろも」——宇治中君と尼君との贈答歌	93
三 浮舟歌と中君歌の共通性——「袖ふれし」について	95
四 あま衣歌と前後の散文との関連	99
第五章 夕霧造型の方法——「才」に規定される夕霧	106
一 はじめに	106
二 光源氏の「教育論」の意図	106
三 才と大和魂	107

四	夕霧造型に見る才の役割	110
五	光源氏の「聖代」の演出	113
六	結び	116
II	『源氏物語』の語り	119
第六章	末摘花巻の方法——語りの構成意識——	121
一	はじめに	121
二	情報を制限される光源氏を表す語り	125
三	末摘花に関する語り	129
四	一人称的語りから三人称的語りへ——語りの構成意識——	132
第七章	賢木巻の語りと表現——表層と深層の二重構成——	135
一	はじめに	135
二	光源氏を取り巻く情勢の変化を表す出来事について	136
三	描写される光源氏の私的行為について	141
四	深層における犯し——賢木巻の二重構成——	145
III	『源氏物語』の引用	151
第八章	桐壺巻「いとかく思う給へましかば」の一解釈	153
—	『漢書』元后伝第六十八 司馬良娣伝の影響	153
一	はじめに	153
二	「いとかく思う給へましかば」の解釈	154

三 『漢書』元后伝第六十八 司馬良娣	160
四 結び—桐壺更衣の造型—	162
第九章 若紫巻における引用表現について	167
一 はじめに	167
二 引歌・和歌的表現に関して—「くらぶの山」について—	167
三 長夜の闇に迷う光源氏	170
四 結び	176
第十章 明石巻の表現方法—住吉神と桐壺院の機能—	178
一 はじめに	178
二 上巳祓の機能—顕宗天皇朝の曲水宴をてがかりに—	179
三 神意と「父霊」の働き	184
四 境界としての明石—取り込まれる光源氏—	191
五 結び	197
第十一章 六条院造型の方法—四方四季構造をてがかりに—	200
一 はじめに	200
二 異郷という空間	201
三 『竹取物語』と異界	203
四 四方四季構造	208
五 結び	212

第十二章	藤裏葉巻の方法——『伊勢物語』引用と変奏——	215
一	はじめに……	215
二	光源氏、内大臣それぞれの思惑……	216
三	『伊勢物語』引用——両家の確執を想起させるものとして——	218
四	大宮の役割——両家の架け橋として——	222
五	結び……	225
IV	教材の表現に関する研究……	227
第十三章	古典作品の教材化——作品の表現をてがかりに——	229
一	はじめに……	229
二	作品研究と教材研究……	234
三	教材重視か学習者重視か……	238
四	結び……	241
第十四章	『源氏物語』桐壺巻「いとまばゆき人の御おぼえなり」の解釈……	244
一	はじめに——解釈上の問題点——	244
二	「まばゆし」の用例……	246
三	「人の+御おぼえ」の用例……	250
四	結び……	251
第十五章	『伊勢物語』二三段の表現——「けこのうつはものにもりける」について——	254

一	はじめに……………	254
二	『伊勢物語』一三段研究史——何がテーマとされてきたか……………	255
三	「けこのうつは物にもりつゝ」——『唐物語』の例……………	256
四	自ら飯を盛る行為——高安の女はみやびではないのか……………	260
五	「筒井筒」部分と高安の女の二首の歌……………	263
六	結び……………	265
第十六章 「家口」か「家子」か——『伊勢物語』一三段の読解のために……………		
一	はじめに……………	269
二	『竹取物語』の用例——「わろきけこにたまはせん」……………	271
三	史書・古記録の用例——「家口」の意味……………	276
四	「けこのうつはものにもりける」の新たな解釈……………	278
第十七章 「浮舟物語」教材化の方法——どのようなテーマを設定するか……………		
一	はじめに……………	284
二	瀬戸内寂聴作「髪」との比較対照の可能性……………	285
三	入水、出家の比較を通して——浮舟の精神的成長を考えさせる……………	288
四	結び……………	302
初出一覧……………		
あとがき……………		
人名・作品名・事項索引……………		
		308

凡例

- 一 『源氏物語』本文の引用は、新編日本古典文学全集『源氏物語①～⑥』（小学館、一九九四～一九九八）によるが、一部表記を改めた箇所もある。
- 一 『源氏物語』の古注釈及び『源氏物語』以外の諸作品の引用にあたっては、各章において使用本文を明記した。